

ウィーンのインド学

雲井昭善

第二次大戦後の一九五五年、オーストリア国と四占領国との間に平和条約が調印されて以来、オーストリアは永久中立をめざす共和国として再出発した。この年、一九五五年にウィーン大学のインド学研究所の創設が決議され、インド学講座が再建されたのである。そして、一九五七年以来、この研究所の機関学術雑誌 (*Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens und Archiv für indische Philosophie*: WZKSÖ) が刊行され、今日に至っている。

一九六〇年の三月二十一日に、ウィーン大学哲学科に所属するインド学科が、インド学研究所 (Indologisches Institut der Universität) として新しく独立した。これを機会に、私は、かねてより親交のあつた現ウィーン大学教授・インド学研究所長フラウワルナー博士 (Prof. Dr. Erich Frauwallner 1898-) の尽力と、オーストリア国政府文部大臣 (Dr. H. Drimmel) の招請に応じ、この研究所の所員としてウィーン大学へ赴任する機縁に恵まれた。そして、一九六一年九月より、六三年の九月までの二カ年間、四回のゼメスター (Semester) を大学で送った。ここでは、過去二カ年に亘るウィーン生活の中で、特に私の眼に映つたウィーンのインド学の現状について、若干の報告をしたい。

ウィーン大学のインド学研究所は、一九六二年の十月まで、ウィーン第一区旧王宮 (alte Hofburg) の一角 (Reitschul) に在る仮研究所 (Wien I, Reitschulgasse 2) から、新しく建造されたウィーン大学 (Neue Universität) の総合研究所の中に立派な研究所をもち、一九六二年度の後期 (Wintersemester) 以来、ここで研究と講義がなされている。現在のこの研究所は大学の本館 (Wien I, Dr. Karl-Lueger Ring 1) から程近くに位置し (Wien I, Universitätsstrasse 7/4) 古典的な建築物の多いウィーンでは、目立つた超モダンな建物で、環境も設備の点でも申し分ない。この四階に、五室をもつたインド学研究所があるわけである。研究所そのものは、開所してなお日も浅く、従つて蔵書も決して充分とは言えないが、前記の機関学術誌 “WZKSÖ” の如き優れた雑誌を刊行し、且つ又、フラウワルナー教授を中心とする研究員 (その数は決して多いとは言えない) が、はげしい意欲をもやして学究生活を続けている。

ウィーン大学のインド学の歴史は古い。いま少しくその歴史を辿ってみよう。

一九六一年に、フラウワルナー博士が、オーストリア学士院紀要 (Kommissionstag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften in Wien) の中で、ウィーンのインド学の歴史について詳細な報告をしていふ (*Geschichte und Aufgabe der Wiener Indologie*)。その中で、博士は、十九世紀初頭よりのウィーンにおけるインド学の歴史を順次に辿りつつ、現在のインド学研究所として発足するに至つたまでの事情、及びその任

務を述べている。いま、それを再録するには十分な紙幅もないが、一応その歴史をしるしてみたい。(なお、京都大学梶山雄一助教授が、『インド学試論集』(京都大学印度・仏教学会刊・第四一五号)に「ウィーン大学インド学研究所」の報告をなしている)。

ウィーン大学のインド学は、一八四五年に Anton Bolter (1811~1869) が、その当時の言語学講座に属する Dozent としてサンスクリットを教えた時に始まる。その後、彼れの後継者として Friedrich Müller (1834~1898) が迎えられたが、なお、インド学講座として独立させるまでには至らなかつた。その意味では、彼れの後継者として次代を背負つた Georg Bühler の功績に、先ず注目しなければならぬ。

Georg Bühler (1837~1898) は、ウィーン大学教授として迎えられた一八八〇年まで、主としてインド (ボンベイ) に在つて古代インドの法典文学を研究し、テキスト校訂・翻訳をはじめ碑文の研究にも従事していた。ドイツのハノーファーに生れた彼れは、ゲッティンゲン大学において言語学と東洋学を修め、その後パリ、ロンドンに学んだ。其処で著名なインド学者 Max Müller (1823~1900) と識りあつた。この機縁が彼れ Bühler をインドへ走らせた、というよりも Max Müller が彼れを推挙したと言ふべきであらう。Bühler は、ボンベイに在る Elphinstone College の東洋学教授として一八六三年に赴任して以来、一八八〇年、病いを得てインドを去るまでの十七年間を主としてボンベイで送つてゐる。

当時、ウィーン大学ではこの機を見逃さず、一八八〇年の十

月に、彼れを *altindische Philologie und Altertumskunde* の教授として迎えた。ウィーン大学における Bühler の活躍は、実はこの直後に始まるのであるが、彼れの顕著な業績は次の二点に集約できるであらう。一つは “WZKSO” の前身である *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* (WZKM) の創刊 (一八八七年) であり、他の一つは、ウィーン大学に *Orientalisches Institut der Wiener Universität* を創立 (一八八六年) したことである。これら二つの業績は、今日のウィーン大学インド学研究所を基礎づけたものであるとともに、ウィーン大学のインド学が、彼れによつてヨーロッパに確固たる地盤と名声とを約束させたと言わねばなるまい。

彼れの死後、Leopold von Schroeder (1851~1920) と Bernhard Geiger (1881~1938) が、それぞれインド学教授として大学にとどまつたが、専門分野において、必ずしもこの両者が Bühler の遺志をついだとは言えない。本来から言つて、Schroeder は比較神話学・民族学の面に関心が多かつたし、B. Geiger はイラニストであつたから……。(B. Geiger は *altindische u. altiranische Philologie u. Altertumskunde* の *Privatdozent* として迎えられた) その点では、折角 Bühler によつて創立されたインド学講座は、その後、大きな発展を遂げたとは言えない。かくして、一九三八年に B. Geiger が退官するまで、ウィーン大学のインド学は実質的には弱体の一途を辿つて来たかのようである。

第二次大戦の勃発は、以上の如き事情を一層悪化せしめた。けれども、今次大戦後の一九五五年、オーストリア共和国の新

出発とともに、再びインド学が脚光を浴びるに至つた。かくして Bühler によつて創立されたインド学講座は、ここにインド学研究所として、新しい首途を祝したのである。この機運を助長し、畢世の努力を捧げた人こそフラウワルナー博士である。と同時に、そのための積極的な援助を惜しまなかつた文部大臣、Dr. Drimmel 氏の尽力も大きく評価されねばならない。けれど、Bühler 去つてより実に六十年の歳月を経ていたわけである。

現在、フラウワルナー博士は、機関誌“WZKSÖ”の編集出版に意欲的であり、その研究課題たる認識論の諸問題ととりくみつつ、インド哲学史全五巻(二巻まで既刊)の完成につとめてゐる。傍ら、若き後進者のための指導を惜しまれない。因みに前記雑誌の出版にはオーストリア学士院(Die Österreichische Akademie der Wissenschaften)が多大の援助をなしてゐることを付記したい。

大学(研究所)での授業は、年度二期制、つまり、冬期授業(Wintersemester十月～翌年一月末)と夏期(Sommersemester三月～六月末)の制度をとり、その間、七月～九月と二月に、それぞれ夏休み(Sommerferien)と冬休み(Winterferien)がある。以下において、過去二カ年間に、私の滞在中になされた講義・演習の内容について報告しよう。

普通講義及び講読は主として初心者のためになされ、研究所があてられる。講座名は、Indologie und Iranistik となつていて、毎週、月、木の午後五時～七時に、フラウワルナー教授が担当している。演習は週二回、同じく月、木の午前十時～十二時まで教授の自宅でなされる。この演習は、主として Dr.

及び Dr. 論文を準備してゐる学生のための演習であつて、論文の主題となるテキストの厳密な校訂、講読、演習がつづけられる。

研究所における教授の講義は、初心者のためのサンسكريット(Sanskrit für Anfänger)文法と、中、上級者のためのサンسكريット(Sanskrit für Vorgeschriftene)講読(一九六二年度は“Bhagavadgita”一九六三年度は“Ramayana”)が行われてゐる。教授の普通講義はインド文学史(一九六二年度)とインド言語とその展開(一九六三年度)が、それぞれなされた。又、教授宅で行われる演習は、Jayanta の“Nyayamanjari”と Udayana の“Nyayakusumanjari”が、一九六一一年～二年に亘つて読まれた。私が実際にこの演習に参加したのは、一九六二年の十月(Wintersemester)以降であつたが、そのための準備として、一九六二年三月～六月に亘つて『成業論』『唯識三十頌』(安慧釈と護法釈)の演習に参加した。それと並んで Mangalamisra の“Brahmasiddhi”、“Brahmavivēka”が、随時にとりあげられた。いま、一九六三年度の演習題目を、*„Zwei Buddhistische Abhidharmaexte und Übungen an philosophischen Texten“* が掲げられてゐるように、一九六二年から三年度にかけて、阿毘達磨哲学の認識論の諸問題が演習課題となつた。そのために『阿毘達磨俱舍論』『大毘婆沙論』『發智論』『順正理論』(“Abhidharmakosa”を併読)をテキストにし、併せて唯識関係の論書をも意欲的に読んだことである。特に難解をもつて知られる窺基の『成唯識論述記』(特に序文の箇所)を読みはじめたのには、全くお手あげであつた。

一九六三年の四月以降、教授は“*Pramāṇavicārya*”のテキスト校訂、翻訳を中心の演習をはじめ、本年の十月よりはカルカッタより G. Bhattacharya の来ウを機に Navanyāya の研究をつづけることとなつてゐる。

フラウワルナー博士の学問的業績については、又別の機会に譲るとして、演習における教授の指導方法につき一言したい。前述したように、演習はあくまでも論文準備の学生のためのものであり、学生の論文主題、要望に応じてテキストを選んでいる。且つ、その主題と関連するあらゆるテキスト、資料を惜しみなく提供し、その上にたつて懇切に指示を与えている。もとより学識の豊かな教授にして初めてよくなしうることではあるが、学生も亦、教授の熱意を十分にうけいれるだけのファイトをもつてゐる。

このような環境の中で、私のウィーン滞在中 Dr. Timmann Vetter (論文題目 *Erkenntnisprobleme in Dharmakīrti*) Dr. Brahmanada Gupta (≍ *Die Wahrnehmungstheorie in der Nyāyamārijā*) Dr. George Chemparthy (≍ *Aufkommen und Entwicklung der Lehre von einem höchsten Wesen in Nyāya und Vaiśeṣika*) Dr. Erich Steinkeller (研究所助手、論文題目未詳) の Kollegen が、教授指導のもとでそれぞれ学位を取得した。その他、研究所と直接間接に関係をもつ人に、Dr. Gerhard Oberhammer (現在、オランダのネーデルヒト大学講師で、フラウワルナー博士の後継者と目される)、Dr. Mittelberger (ヒッタイト語の研究をし、同じくネーデルヒト大学講師) 及び目下、論文を作製中の L. Schmidhausen 氏

(ボン大学ハッカー教授の弟子でフラウワルナー博士についている) の各氏があり、現在、教授のもとでバーリのアビダルマを研究している Fr. Renate Klab (ケルン大学出) がいる。

言うまでもなく、フラウワルナー博士は、夙に“*WZKM*”、*WZKS*”誌に数々の業績を発表された碩学である。その著『インド哲学史』や『仏教哲学』にもうかがわれるように、教授は、哲学者であるとともに偉大な歴史家である。梵・藏・巴は勿論のこと、漢文の読解力も言うに及ばず、今では日本文の論文をも読みこなしつつある。教授の学問的な方法は、明確な思想史の理解において、資料でもつてインド哲学の諸思想、年代を決定づけようと試みる。認識論 (*Erkenntnistheorie*) に関する教授の幾多の業績は、実はこうした整然たる歴史観と、明晰にして鋭利な思考力の上にものされたものである、と言わねばならない。

二カ年に亘る私のウィーン生活において、直接に教授の学問そして、人間味豊かな温かい性格に接して感じたこと、そのことのすべてがウィーンのインド学であると言いたい。

この稿を書くにあつて、ウィーン滞在中、私に寄せられたフラウワルナー博士の指導と厚意に甚深の謝意を表し、併せてわれわれの Kollegen たちの友情に対しても、衷心より感謝の辞を捧げたい。(一九六三・十一・十五)

自然と歴史

西谷 啓治

(四十四卷一号に論文として掲載予定)